

# 【聴楽032】 高村幹斎『扁鵲志志』と江戸の立志論 ————— 小泉吉永

## ■高村家の家系

- ・初代:高村伝左衛門盛嗣(播磨国三木城主、別所長治の一族、高村二平兵衛(次平兵衛)治之の次男)。信長の中国征討軍(総督羽柴秀吉)の攻撃に敗れた三木龍城戦(天正6~8年)の後(二平兵衛は戦死)、浪人となった伝左衛門は、天正13年(1585)頃、主従4名とともに淡路国江井浦(当時17戸)に移住し、灰商人(灰商人とは、灰を買い集めて諸国に送る業である)となり「灰屋伝左衛門」と称したが、算筆のできる者もほぼ皆無の状況で、庄屋に推され領主の許可を得た。
- ・2代:助兵衛貞之、3代:又兵衛行昌、4代:助右衛門道盛(慶安2年(1649)江井浦の異変に際し、淡路島行政のトップ、洲本仕置より褒賞)、5代:治兵衛家頼、6代:治兵衛有親、7代~11代:治兵衛、12代:綱右衛門雅郷、13代:三左衛門甫恭★代々庄屋を世襲
- ・14代:高村悠斎(高村家支流の某(船乗りを家業とする)の長男として生まれる。3人の子があったが2人は夭折)
- ・15代:高村幹斎(長男、庄吉。次男、俊平は村上家の養子、明治初年に医師(医師免許第13号)となり、洲本で開業。長女、いととは萩焼の大家小倉圓平(円平)に嫁ぐ。満州風俗人形(圓平人形)は満州国皇帝、宣統帝溥儀から満州土産として天皇家へ献上された)
- ・16代:高村庄吉(志筑に旅館兼料亭「一楽亭」開業)、17代:高村春吉(志筑町役場助役)、18代:高村忠之(3人兄弟の次男が英之氏)

## ■高村悠斎と幹斎 \*約3万名収録の『国書人名辞典』3巻による(高村姓3名のうち2人が高村氏ご先祖)。★は補註

**高村悠斎** たかむらゆうさい 医者・心学者 (生没)生没年未詳。天保末年(-1844)頃没か。(名号)名、周平。字、謙光。通称、米屋宗兵衛。号、悠斎・有斎。(家系)子、幹斎。(経歴)淡路江井浦の庄屋の分家筋に生れ、初め船乗りであったが、のち溝上孝琢に学んで医を業とした。傍ら京都の上河淇水に石門心学を学んでその高弟となり、帰郷後は家塾大洋舎を開いて淡路に心学を広めた。また、徳島藩の命を受けて領内を巡講した。(著作)大洋雑話(天保5刊)

★明和2年(1765)生、天保5年(1834)2月14日没(位牌による。法名「謙光智雲居士」)。享年70。淡路一宮町江井浦の庄屋、高村伝左衛門支流の家に長男として生まれた。家は、代々船乗りを家業としていたが、幼少から学を好み、家業の手伝いはあまりせず学問の道に励む。長ずるに及んで医術修行に励み、享和3年(1803)、洲本城代、稲田氏の侍医、溝上孝琢の門に籍を連ね、江井にて医師として暮らす。当時、全国に普及していた石門心学に触れ石田梅岩の教えに傾倒、京都に上って上河淇水(正揚・子鷹・東海)に入門し心学を本格的に学んだ。帰郷後、家塾「大洋舎」を開いて淡路に心学を広めた。また、徳島藩の命を受けて領内を巡講した。悠斎は70歳の天寿を全うし江井浦に没し、門弟によって建立された墓は後に移転し、現在、津名町志筑竹林山八幡寺墓地(墓碑「高村周平墓」)。著作『大洋雑話』は、文政元年(1818)に草稿の一部が完成したが、古稀の齢のため、校訂を三男貞(幹斎)に委ね、天保5年(1834)初編1巻を公刊(以後未刊)。



**高村幹斎** たかむらかんさい 医者・本草家 (生没)生没年未詳。江戸時代後期の人。(名号)名、貞。字、士固。号、幹斎。(家系)高村悠斎の男。(経歴)淡路の人。播州赤穂で儒を学んだ後、熊本藩医村井琴山に内科を、長崎の吉雄如淵に外科を学び、各所転住の後、洲本に移る。村上文庵と親交があり、文庵と共に淡路最初の種痘法を実施した。(著作)扁鵲志志(天保3刊)

★享和2年(1802)生、嘉永3年(1850)9月5日没(位牌による。法名「文幹院宥祖本諱居士」)。享年49。享和2年、高村悠斎の3男として江井浦に生まれる。少年時代は播州赤穂に遊学して儒教を学び、青年時代には熊本藩医村井琴山に内科を、長崎の蘭方医吉雄如淵に外科を学び、さらに、高野山、兵庫、京都、大坂と転じて帰郷し、洲本に居住。村上文庵らとともに種痘法の普及に努め、まず自分の家族に試みるなどして信用を高め、それを一般の人々にも広めた(淡路最初の種痘医)。また、易学、植物学に詳しく、詩文にも優れていたが、嘉永3年、49歳で没した。墓碑は、父、悠斎の墓の隣りに現存(墓銘「幹斎高村先生墓」)。この墓は、長男、高村庄吉が志筑町に転居し元汽船場筋にて旅館兼料亭「一楽亭」を経営していた時に、洲本町専福寺墓地より移転したもの。高村家は庄吉養子の春吉(志筑町役場助役)より長男忠之(東京都調布市在住)に継承しているが、近年、高村忠之の襖の下張りから種痘の医学書の断片が発見された。



## ■高村幹斎年譜

年譜中の\*は『扁鵲志』による

| 元号・西暦       | 年齢  | 幹斎事蹟   | 悠斎事蹟(†)、その他  |
|-------------|-----|--|--|
| 享和 2年(1802) | 1   | 高村悠斎の三男として江井浦に生まれる。<br>* 幼時より父の仕事を受け継ごうと医学を志す。<br>* 少年時代に「癖疾(腹がふくれる小児病)」に罹る。   | † 高村悠斎(1765-1835?)は家業の海運業よりも学問に打ち込み、医業を究め、江井浦で開業。その後、医業を休業して上京し石門心学を学ぶ。  |
| 文化13年(1816) | 15  | 少年時代、播州赤穂に遊学して儒教を学ぶが、眼病を患い帰宅。1年余で眼病は平癒。<br>* 武庫(現・兵庫県沿岸部)在在中は、才子として知られ、室内に自ら「風流才子」と大書した扁額を懸けていたが、後にこれを「傲慢の誇示」と悟り恥じた。<br>* 修学上最も重要な志学の年(15歳)から約10年間は病気のために「読書の業」が全くできず。   |  |
| 文政元年(1818)頃 | 17  | 20代前半に熊本藩医・村井琴山(文化12年没)家に内科を、長崎の蘭方医・吉雄如淵(淵)に外科を学ぶ。<br>* 眼病完治後、数年かけて肥前・肥後方面を遊歴。潔癖な性格も災いして、精神疾患(気疾)となる。効果的な薬がなく、静養に努めたが、前後10年間は全く読書ができず。<br>* 長崎遊学時代に「あらゆる国の最善の医術を探り得て、世界の夭折の民を蘇らせたい」という意味の漢詩を詠む。                                  | † 文政元年、高村悠斎が『大洋雑話』数編を執筆。<br>* 西国旅行中、長崎県平戸を訪れた時、友人より「ヒジキを多食する漁村に痢病を患う者がいない」と聞く。<br>* 豊後国滞在中、ある医学生と「世に広く用いられる医者」についての問答。幹斎は「医学を修め、医術を磨くのみ」と助言。 |
| 文政7年(1832)頃 | 23頃 | 23-24歳頃、高野山居住(一寺に寄寓し医術を施す)。  |  |
| 文政13年(1830) | 29  | * 一念発起してこの年の春に京都へ出て、約4カ月(百有余日)の苦しい治療に耐えながら医学を学ぶ(「良師・益友と文を論じ、医を談じて、以て志を養うのみ」)。<br>* 小康状態の合間に、医者を目指すまでの経緯や見聞、医学上の見解や医学生への助言をまとめた『扁鵲志』を書き上げる。10月26日脱稿(『扁鵲志』自序)。<br>* 京都遊学の目的は「京で第一の医者になる」こと。京都移転後数カ月で、京都の病人を診察して治したことから医者としての信頼を得る。 | * 文政13年の春、京都榎木町の魚屋某兄弟とその友人が鯨の毒に中って死亡。<br>* 文政13年7月2日、京都大地震に遭遇。これを契機に自らの地震論を下巻附録に記す。<br>* 文政13年10月22日の夜、数万もの病神と死闘を繰り返す霊夢を見る。その詳細を下巻「病神」に記す。   |
| 天保 3年(1832) | 31  | 『扁鵲志』が京都(吉田屋治兵衛ほか板)で刊行。復古社編『正統詩話』刊行(幹斎の古体詩を多く収録)。  |  |
| 天保 4年(1833) | 32  | 父の著作『大洋雑話』を校訂、天保4年11月の跋文を付す。   |  |
| 天保 5年(1834) | 33  | この前後数年間、大坂在住。<br>2月、悠斎死去に伴い、江井浦へ帰郷。  | † 天保5年2月14日(位牌)、悠斎死去(享年70)。法名「謙光智雲居士」。墓碑銘「高村周平墓」。<br>† 天保5年3月、高村悠斎作『大洋雑話』が三都で刊行。   |
| 天保13年(1842) | 41  | 淡山子作『奇談新編』刊行。本書「淡山子伝」を執筆(本文および頭注にも関与の可能性あり。石崎又造・武藤禎夫両氏は、淡山子=高村貞本人と推定)。<br>天保末年~嘉永初年に2男1女(庄吉・俊平・いと)をもつける。俊平は嘉永2年12月生まれ。   | 『奇談新編』補注に「淡山子は40歳で未だ妻を娶っていない」とするが、幹斎が晩婚であったことと符合する。  |
| 嘉永 2年(1849) | 48  | 死去前年に、村上文庵(幹斎次男俊平養父)らとともに種痘法の普及に努め、まず自分の家族に試みるなどして信頼を得て、淡路全土へ広めた(淡路最初の種痘医)。  |  |
| 嘉永 3年(1850) | 49  | 嘉永3年9月5日没(享年49、法名「文幹院有 <sup>ちよつ</sup> 廻本謨居士」)。子供が幼いため、親類等が協力し墓碑建立。墓碑銘「幹斎高村先生墓」。墓石側面の碑文は門人・紀伊の片山元方作(洲本町・専福寺墓地より淡路市志筑・八幡寺墓地に改葬)。   |  |

## ■『扁鵲志志』の概要と構成

○「著者は、その志す所を存分に述べて、これを天下に告げ、また、将来医学を志す者に対しても、己の志を支え励ました事柄を推して人々を励まそうと欲したのであろう」(村田常道序文)

○門人・高垣氏の「本書で論じられたことは私共の医療技術に多大な影響を及ぼすものではないとしても、先生がご自分の志を表明され、医学界全体の志を励ますものです。どうして将来に無益なことがありますか。お願いですから、これを上梓し、公になさってください」との切望に対し、幹齋は「これは浅薄な言葉であり、どうして語るだけの価値があるのか。しかしながら、医者としての志は、まさに本書に記した通りで、その志ならば、医療における学問も治術も精緻なものに至るであろうか。私はその点を諸国の四方の処士に問いただしてみたいと思う。治術については、本書の2篇・3篇に書き記して続刊したい」と述べた。(門人高垣静序文)

\* 本書は「治術に有益な医書」というよりも、「医を志す者の指針や心得書」として上梓されたものであり、特に、治術に関しては幹齋は2篇・3篇で展開する構想を述べる(ただし、本書でも『傷寒論』や古方に基づく医学的知識や名医群像の一端を伝える)。

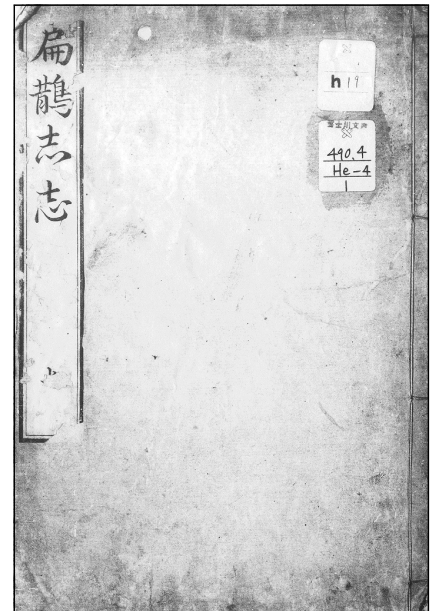
\* 上下2巻構成で、上巻は「量」から「沢村長十郎」までの30項(目次は「朱柳橋」「勞瘵」を脱落し28項)、下巻は「傷寒論非仲景之書」から「病神」までの30項で、合計60項。今、これらの内容を整理すると、次のようになる。

### ◎医学生・医者之志と心得=21項

- ・量(上1) = 己の分量の中で最大限努力すること。己の志。
- ・今(上2) = 今を失わず、後を着せず。学んで怠らぬ工夫。
- ・書(上7) = 医学生は四大家を熟読せよ。古典と現在の権衡。
- ・韻語(上9) = 医書には韻語が多い。音韻に注意して読め。
- ・美人(上11) = 都鄙の美人の譬え。『金匱玉函』は珠玉の書。
- ・萬屋(上12) = 「万屋」「一屋」と実態のずれ。医者への戒め。
- ・自信(上13) = 京都松原の急患の治療。己の仕事は己を信じること。
- ・宝(上14) = 身の内の宝を全うせよ。医者は常に学べ。
- ・其二(上15) = 身の内の宝を全うせよ。外の美は内なる美に従う。
- ・其三(上16) = 我が心は我が師。患者の苦痛を体感せよ。
- ・其四(上17) = 身の外に宝は無い。
- ・師(上18) = 人だけが師ではない。天下の事物を師とせよ。
- ・遠探(上19) = 博く遠く探って古典の不足を補え。私の志。
- ・言行(上29) = 言行は君子の要。医術も同様。
- ・傷寒論非仲景之書(下1) = 『傷寒論』は張仲景の作にあらず。
- ・呪祝(下8) = 呪禁・祝由科。心誠にこれを信ずること。
- ・理法(下11) = 道理も法則も重要。一方に偏るべからず。
- ・闕疑(下17) = 疑いを除くすは古書を読む一法則。読書の心得。
- ・果敢(下18) = 豊後の医学生の逸話。世に用いられる医者とは。
- ・総括(下22) = 河野氏の問い「一言で医道とは何か」。
- ・病神(下30) = 挑戦状を突きつける病神の夢は、自身の戒め。

### ◎医学上の思想・知識・技術=26項

- ・方法(上3) = 方と法。法は方を制する。方は法に従う。
- ・有定法而無定方(上4) = 定法あって定方なし。方は張氏に限らず。
- ・其二(上5) = 定法あって定方なし。一証一薬に限らず。
- ・診法(上6) = 診脈の基本。緊脈・弦脈・支結・急結。
- ・攻補(上8) = 攻(邪気除去)・補(虚=正気不足補充)の治療。
- ・癥(上10) = 癥(腹部の病気)の治療薬。
- ・鯀(上20) = フグの毒を侮るな。スルメの水煮の効果は如何。
- ・小判魚(上21) = コバンザメの特徴と薬用・食用上の効用。
- ・羊栖菜(上22) = ひじきの効用。大根おろしの効用。



- ・臧毒(上25) = 臧毒患者の治療と経過(死去)。その治療薬。
- ・齧漏(上26) = 病名のない不治の病(歯槽膿漏)。
- ・笋・鯉(下2) = 古方も今方も治療に活かすべし。馬鹿の一つ覚え。
- ・齧色(下4) = 歯ぐきの色と梅毒。熱が下がりにくい病気。
- ・臭(下5) = 白虎湯の効用と臭気による判断。
- ・息(下6) = 一昼夜の呼吸数。医者はまだ一呼吸で診断すべし。
- ・半表半裡(下9) = 病気が体表部と体内の中間にある状態。
- ・油(下13) = ごま油の効用。油脂は辛辣を緩和させる。
- ・胡瓜(下14) = キュウリによる火傷治療。瓜類その他の火傷薬。
- ・大黄(下15) = 大黄は分量が大切。他薬併用時の心得。
- ・正邪気(下16) = 邪気より正気に病みやすい。正気に注意せよ。
- ・水腫(下19) = むくみ・腫れ物の症状と診断。
- ・萍蓬根(下20) = コウホネは血液の状態を改善する。
- ・橄欖(下21) = オリーブの解毒作用や効用。
- ・患上察下(下23) = 上患は下部、前患は後面を観察せよ。
- ・気血陰陽(下25) = 天と人の陰陽。陰陽における無形と有質。
- ・濃淡煮(下28) = 薬種による濃淡煮の区別。

◎人物逸話中心=12項

- ・【朱柳橋】(上23) = 清の朱柳橋の治療。綾野家秘伝の腹候。
- ・【劣瘵】(上24) = 紀州有田の結核患者と艾火の効用。
- ・三女医生(上28) = 傲慢・姦悪な女医と文学先生の逸話。
- ・沢村長十郎(上30) = 医師、各務文献と役者、沢村長十郎の逸話
- ・漁夫婦(下3) = 漁師の妻、富士の医才。北越の漁師の診断。
- ・琴山先生(下7) = 村井琴山先生の的確な治療(一部辻氏談)。
- ・青洲先生(下10) = 華岡青洲先生の神業は外科のみにあらず。
- ・米(下12) = 紀州医者、藤浪氏の度量と深情。
- ・方名(下24) = 高野玄斎先生の名言。薬方と効果の関係。
- ・中村梅玉(下26) = 歌舞伎役者、中村梅玉の子弟教育。
- ・得治不得解(下27) = 治を得て解を得ぬ薬。吉益南涯先生の言葉。
- ・草創(下29) = 後藤良山・吉益東洞二翁など創始者の功績と苦勞。

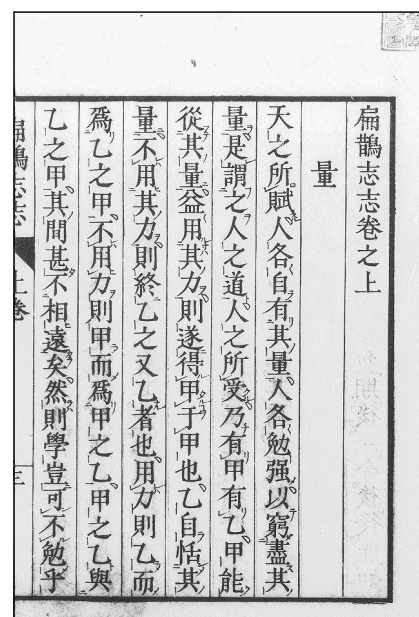
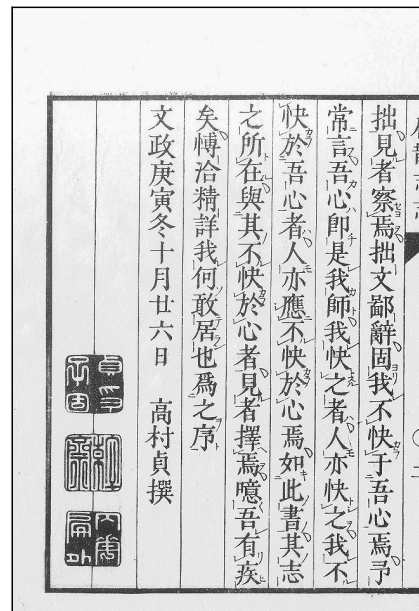
◎その他=1項

- ・多寡貴賤(上27) = 多寡は貴賤の評価基準。不純物混入の悪徳商法。

上巻は医学生・医者志の心構えが中心で、下巻は医療技術など実際的な事柄の比重が高い。人物逸話を多く挿むが、しばしば教訓的寓意が含まれる。特に、下巻末尾の「病神」は長文で、薬種などの専門用語も多く難解だが、要するに、数万もの病神、この世のあらゆる疫病神が、作者に散々罵声を浴びせて喧嘩を仕掛ける夢を長々と綴る。冷静に考えれば、この夢は全て己の精神から生じたものであり、医者志の覚悟と志を問い正す自身の戒めであり、自らが自らに課した挑戦状であったと自覚するに至る。

序文に示す通り、本書は扁鵲の如き名匠となつて世を救いたいという「志を志」したもので、徹頭徹尾、己のための著作と言えよう。

なお、本書下巻末「附録」は、本書執筆中の文政13年7月2日に発生した京都大地震に際して、作者の地震論を述べた小文であり、末裔の高村英之氏の地震予知の仕事との不思議な因縁を感じる。



## ■ 幹齋の立志論

- 幹齋の志は一つ。「医学を志して天下の病人を救い、儒学を志して天下の弊害から人々を救う」。(村田常道序文)
- 志というものは、己の怠慢を除くためのものだ。反対に、傲慢は魑魅(ちみ)の魔(ま) (不吉) を引くようなものである。志を立てるのは、まさに太陽の天光に照らされるようなものである。太陽の天光に照らされれば、魑魅百魔はその影から逃れることは出来ない。鴻志(大志)に身を挺すれば、怠惰も傲慢も消え失せないことはない。(村田常道序文)
- およそ物事を成さなければ、それで終わりである。仮にも物事を成すなら立派に成すまで放っておかない。これが一人前の男の志である。医者には賤しい(謙遜の意)仕事だが、経世済民(世を治め人民を救う)の道の一つである。そして医術の巧拙は、常に長寿か、夭折かによる。医術は、どうしてその場限りの間に合わせでよいだろうか。医学修得の浅深が医術の巧拙を分けるのであるから、どうして医学の習熟に努めなくてよいだろうか。まず医術を修め、その成果を人に施して初めて、医者の本分を全うすることができる。医術は臨床による見聞が多いほど精しく、医者としての手柄は知識の博さに伴って広範なものとなる。この多聞・博識こそ医者務めである。(門人高垣静序文)
- 文政13年の春、京都へ旅立つ際の留別の詩(幹齋自序)
- 欲広生生業。向京命短蓬。(生生の業を広くせんと欲して京に向かって短蓬を命ず。)
- 鯨波促予起。蜃気導行通。(鯨波予を促して起り、蜃気行を導いて通す。)
- 不濺分携涙。為期濟世功。(携を分かつの涙を濺がざるは、世を濟うの功を期するが為なり。)
- 壯心難説尽。天外指飛鴻。(壯心説き尽くし難く、天外飛鴻を指さす。)
- 生まれながらの生業(医学)を広めるために京にむかい、風に吹かれてさすらう短蓬のような私。  
しかし、大勢の声援に後押しされて立ち上がり、蜃(蛤または竜の一種)の吐気が行く手を導く。  
握手した手を離しても涙を見せないのは、世を救う大事業を為し遂げようと心に決めたからだ。  
私の勇ましく盛んな心は言葉では説明できないから、遙かかなたの空に飛ぶ鴻(白鳥・雁などの鳥)を指さそう。
- 天が与えるものには、人それぞれに分量がある。一人一人が物事に努力して、己の分量を極め尽くす。これを人の道と言う。各人が享けるものには甲乙がある。甲がよくその分量に従ってますます持てる力を発揮する時は、ついに甲の甲たることを得る。…私は生涯、勉強(努力)の力を極め続けようと思う。願わくば、乙の乙たる者を免れたいばかりだ。これが、私のささやかな志である。(上巻「量」)
- 学んで怠るな。強いて息むな。今を失うな。後(未来)を期待するな。…今を失うことなく、後を期することも無い。これを、「これを学んで怠らず、強いて息まず」と言う。(上巻「今」)
- 私は常に自分に言い聞かせた、「己の仕事は自分を信じることなのだ」と。己を信じるとはどういうことか。それは、まず自ら己の才能の長短や学問の浅深を知ることである。自分の器量をよく熟知すれば、他人が己を実際以上に持ち上げてても大喜びしないし、世間に己を遠ざける者が多くてもむやみに悲しむこともない。憂いも喜びも、己の心には関係ない。私はこれを「丈夫」と呼ぶ。(上巻「自信」)
- 人はそれぞれ生まれながらに身の内の宝を持っている。身の内の宝を全うすることによって、初めて身の外の宝もおのずと身に従うものだ。これは天下みな同じである。医にして志無き者は、好んで居宅を華美にし、好んで衣服を華麗にし、ただ外見の美ばかりを意識する。外見の美はいよいよ盛んにして、内なる美はいよいよ微かとなる。(上巻「宝(其二)」)
- 一芸を極めた者は、誰もがよく行を砥ぎ、術を研ぐのだ。戯技(戯れの芸)ですらこうなのだ。ましてや医者は、どうしてその場限りであってよいだろうか。私は、つくづく今の医者を見て思うが、自らその業を修め、心をその術に専らにせず、日々取り組むことは記誦(暗記するのみで理解や実践がないこと)、さもなくば詩賦もしくは書画など、いたずらに名聞を得るための遊芸ばかりで、人を救って物事を成就することには全く関心がない。(上巻「沢村長十郎」)

## ■高村幹斎をめぐる人々

- 村田常道(庫山)**＝『扁鵲志』序文。漢学者。生年未詳、天保8年(1837)6月5日没。名、常道。通称、兵部。号、庫山・酔古堂・楽国生。摂津兵庫の人。藤田撫山に書を、伊藤東里に儒を学ぶ。京都衣ころものたな 棚御池北に住す。猪飼敬所(折衷学派)と親交。著作は、源々論(天保3年刊)、庫山日記、新論(文政8年刊)、酔郷三種、正論(文政9年刊)、村子集、大学正義(文政3年刊)、中庸正義、論孟約義。
- 高垣静(子篤)**＝『扁鵲志』序文。紀州の人。幹斎門人(3年間師事)。
- 淡山子**＝『奇談新編』作者(全49話中第25～46話の22話は紀洋子補筆)。「淡山子伝」によれば、他所より大坂に移住、人となりは簡素でおおまか、外見を気にせず、好んで書を読んだが、博覧を心掛けることなく、常に「聖人の教えは六経にあり、聖人の道は私の心にある」と言った。…恐らく、彼の志は経世にあったのであろう」と述べる。「淡山子伝」末尾に、「其の姓字を失す。今、特に其の嘗て予に語る所の者を記して以て之が伝とす」と述べ、淡山子の素性を曖昧にする。また、「良」補注では、「淡山子は自ら楽しむ人である。その楽しみを私は良く知っている。しかしながら、四十にして未だ娶っていない。恐らく貧乏だからだろう。…全くの貧乏仙人である」と評する。
- 「良」某**＝『奇談新編』補注者。随所に頭注を付すが、本文第29丁裏の「又曰く、鶴背に在りて饑え死すのみ。使人絶倒す」の2行を後印本で増補。幹斎の「淡山子伝」を、「又曰く、淡山子論、奇なり。高村子が筆健(健筆)終わりに至って益暢まさますぶ」と賞賛する。
- 三橋子(放言)**＝『奇談新編』序文。『奇談新編』は単なる笑話集ではなく、隠れた寓意を読み取るべきと主張。
- 村井琴山(大年・椿寿)と辻某**＝村井琴山は、青年時代に幹斎に医学を授けた恩師。熊本で入門して学び、『傷寒論』伝授を許された。『扁鵲志』下巻の「琴山先生」の逸話は長崎の医学生である辻氏談。琴山は「方に精通し」、遺著に『傷寒論講録』『類聚方議』『医道二千年眼目編』『和方一方法』等がある。著作は百余巻に及ぶが、公刊されたものはわずかに二、三書という。
- **村井琴山**…享保18年(1733)熊本生れ、文化12年(1815)3月、熊本にて没。江戸中期から後期の古方派医師。父見朴も医師で、盲目ながら熊本医学館の教授。父の講義を助け、父の死後、京都に行き、張仲景の『傷寒論』の価値を世に知らしめ、万病一毒説を唱えた吉益東洞に学び、帰郷して九州各地で『傷寒論』を講述。晩年に熊本藩医。
- 綾野氏・朱柳橋**＝長崎遊学中、同志の綾野氏と旅館街に出かけ、遊廓から帰る清人と遭遇。その一人、朱柳橋(吳国乍浦の人)と筆談で問答。綾野氏の父は鍼術の名医で、腹候により半身不随を1-2年前に予測できたが、幹斎はこの秘伝を授かった。
- 高杉氏・中川先生・各務文献**＝大坂の友人・高杉氏と浪速安土町に中川先生を訪問した際、中川氏より、鏡氏(各務文献\* 江戸後期医師、『整骨新書』で有名)が夜半に棄戸(放置死体)を背負ったり枯骨を拾い歩いたことや、整骨術修得のために、己の臂を9回も折ったという逸話を聞く。
- 華岡(花岡)青洲**＝『扁鵲志』下巻に「青洲先生」の一章を載せ、シーボルトが治療できなかった患者を完治させた逸話を紹介。外科のみならず眼科・産科その他でも優れた医者であったことを絶賛。
- **華岡青洲**…宝暦10年(1760)10月、紀伊平山生れ、天保6年(1835)10月没。漢蘭折衷医方の大家で、華岡流外科の創始者。医家に生れて京都に遊学、吉益南涯に内科、大槻見立に外科を学び、紀州に帰って内外合一、活物窮理、漢蘭折衷を唱え、華岡流外科を樹立。1000人余の弟子があり、文政2年(1819)在宅のまま藩侯の医師・侍医となる。トリカブト、チョウセンアサガオ(マンダラゲ)を主成分とした通仙散という麻酔薬を実用したことは、妻が試験内服して失明した逸話とともに名高い。後世に青洲の著述が多く伝わるが、いずれも写本で、門人が筆記したものばかりである。
- 藤浪氏**＝紀州の人。藤浪方岳力。「医に長け、性格は人並み以上に卓越して度量大きく、情け深い人」で、「恵にしてかつ智あり」と賞賛(下巻「米」)。
- 高野玄斎**＝古方の解釈で随一と賞賛(下巻「方名」)。
- **高野玄斎**…明和8年(1771)生れ、文政10年(1827)没。高野玄端の嫡子で、江戸に留学し、当時有名な蘭方医だった杉田玄白の天真楼塾に入り、大槻玄澤らとともに蘭方医学を学ぶ。水沢に帰郷後、医者となる。玄斎は玄白や玄澤と文通しており、現存する書簡には学問的なことを記さない。長英が養父玄斎から蘭方医学の手ほどきを受けた記録も残っておらず、かりに玄斎から医学を学ぶことがあったとしても、レベルが低く、長英の向学心を満足させるものではなかった。
- 西村十丈**＝俳歌の宗匠で、大坂歌舞伎界の頭領・中村梅玉とその弟子・中村芝翫の逸話を幹斎に語る。
- 吉益南涯**＝下巻「得治不得解」で、南涯が教える喘息に効果的な薬の処方について言及。
- **吉益南涯**は、寛延3年(1750)京都生れ、文化10年(1813)6月、京都で没。江戸時代中期の医家。吉益東洞の長男。24歳のとき父の死去で医業を継ぐ。天明8年(1788)京の大火で大坂に移り、43歳のとき再び京都に帰った。父の万病一毒説を補充し、毒は気、血、水に現れるので、薬もそれぞれに作用するものを用いなければならないとし、『気血水薬徴』を著わした。ほかに『医範』『傷寒論精義』『方機』などがある。
- 後藤良山・吉益東洞**＝古医道を唱えて海内を風靡した。後続の医者で両人の恩恵を受けない者はいない。世の中には、多大な恩恵に深く親しみ、恩恵を受けていながら、それを知らない者が多い。

■江戸の立志論 → 別紙、小泉著『心教を以て尚と為す一江戸に学ぶ人間教育の知恵一』(2020年5月刊行予定) 参照